

国際経済学会第84回全国大会(2025.10.4-5,中央大学)第6分科会
企画セッション「新国際価値論は失業をどう捉えるか」

第1報告 新国際価値論と有効需要の原理

塩沢由典(大阪市立大学名誉教授)

報告要旨 先進国において人々が貿易に関して強い関心をもつのは、自分の雇用が脅かされることである。いわゆる Trump 関税も、それにより米国の産業と雇用を守ることが主要な目的とされている。これに対し、国際貿易理論では、失業は主要な主題としては扱われないか、副次的な問題とされることが多い。この乖離はしばしば経済学の知識のあるなしによる対比と考えられ解説されている。本報告は、これとは反対に、国際貿易論(国際ミクロ経済学)の理論構造そのものに問題があること、そのため貿易論が失業とそれにとまなう地域の産業衰退を扱えない構造になっていることを指摘し、代替的な国際貿易論(新国際価値論)を紹介するとともに、初歩的ながら新しい理論によりいかなる問題が見えてくるかを提示する。

目次(Table of Contents)

1. 意図しないこと
2. 典型的な一議論(Autor versus Heckman)
3. 議論の骨格と全体像
4. SMTの経済像
5. 固定資本と稼働率
6. 正則価値の新しい定義
7. 国際価値論の特徴
8. 国際価値論による失業の分析/総需要政策の限界
9. アメリカのラスト・ベルトと都市人口
10. 日米貿易摩擦の歴史
11. 特定産業・特定地域への打撃
12. 従来 of 貿易理論の問題点
13. 国内競争と国際競争の違い(1)
14. 国内競争と国際競争の違い(2)
15. 地域衰退はなぜ持続するのか
16. これからの課題

参考文献

付録 1. α の計算および特徴